

大分国際車いすマラソン

まちなかを駆ける!

大分が誇る世界最高峰の大会

世界トップレベルの選手が集まる  
大分国際車いすマラソン。

1981年にスタートした本大会は、世代を超えて多くの人に感動を与える、大分が誇る世界最高峰の大会へと成長しました。

本大会を支えるのは、熱戦を繰り広げる選手、選手をサポートするボランティア、そして沿道から送られる声援です。

今回は、大分が誇る本大会の歴史と見どころを紹介します。



大会の生みの親である中村裕博士。「保護より働く機会を」をモットーに障がい者の自立を促すために尽力した。  
(写真提供:社会福祉法人 太陽の家)



記念すべき第1回大会、スタート地点へ向かう選手たち。世界14か国117人がハーフマラソンに参加した。  
(写真提供:大分県)



トップを走るオーストリアのゲオルグ・フロイント選手(右)と、アメリカのジム・クナウプ選手(左)が手を握りあってゴールした第1回大会のゴール地点での写真(写真提供:大分合同新聞社)



OITA INTERNATIONAL WHEELCHAIR MARATHON

国内外から  
評価を受ける  
国際大会

世界で初めて、車いすだけのマラソンの国際大会としてスタートした「大分国際車いすマラソン」。1981年の国際障害者年を記念しスタートして以来、毎年開催され、世界最高峰の大会として国内外から高い評価を受けています。本大会の歴史は、この人なくしては語れません。障がい者が働き、生活する施設である「太陽の家」の創設者、そして本大会の生みの親でもある中村裕博士(1927-1984)です。整形外科医として勤務していた1960年にイギリスに留学し、国立脊髄損傷センター(ストーク・マンデビル病院)の院長・グットマン博士の医療方法に衝撃を受け、スポーツを取り入れた治療を学びます。当時の日本では、身体障がい者は病院や施設、家庭に閉じこもりがちでした。しかし、重度の身体障がい者に車いすを利用してスポーツを楽しむことを教え、社会復帰の道を開くグットマン博士の考えに感銘を受け、日本に戻った中村博士は障がい者の自立を促すべく尽力を続けます。

タイムを競う  
レースで単なる  
レクリエーション  
ではない

「保護より働く機会を！」をモットーに「太陽の家」を設立、それに並行して障がい者スポーツの普及にも情熱を注ぎます。世界初の車いす単独のマラソンを提唱。1981年に記念すべき第1回大会が行われ、世界14か国・117人がハーフマラソンに挑戦しました。ゴールでは、1位と2位の選手が手をつなぎゴールし、同時優勝を主張。しかし、中村博士は1位と2位の選手に差をつけ、「この大会はタイムを競うレースであって単なるレクリエーションではない」として、その後の大会の方向性を位置づけました。毎年約2,000人のボランティアが大大会運営を支え、大分のホスピタリティは世界一、と言われるまでになりました。東京2020パラリンピック競技大会の年にちょうど40回目を迎える「大分国際車いすマラソン」。過酷なスポーツに果敢に挑むアスリートたちは、沿道から送られる声援に後押しされ、苦しい時間を乗り切ることができただけです。多くの感動とドラマを私たちに与えてくれる選手たちに、今年も沿道から熱い応援を!